

存分に黙つて居られますものね。とにかく胸がすつきりいたしました……。」

私は別れを告げようとしてゐた。薬を送る約束を繰り返して、もう一度考へて見た上で何か欲しいものがあつたら言つてくれと促した。

「何も欲しくはございません。このままで澤山でございます、お蔭様で、」と極めて大儀さうに、しかも感動したらしく言ふ、「どうか皆様お達者で！　ですが、旦那様、お母様に一言申し上げて下さいまし、——この邊の百姓は貧乏でございますから、——若し、幾分でもお年貢を減らしていただけたら！　百姓たちは土地も足りませんし、利もございませんから……さうして戴けたら、あなた様をどんなにか有難がることでございます。ですけれど、何も私は欲しいものはありません、——私はこのままで何もかも澤山でございます。」

私はルケリヤの願ひを叶へてやらうと誓つて、既に戸口まで歩み寄つてゐた、……すると彼女はまた私を呼び戻した。

「覚えていらつしやいませう、旦那様、」と彼女はいつた。その眼のうち、唇の上には何かしら奇蹟的なものが閃いた、「私がどんなにお下髪をしてゐましたか？　覚えていらつしやいませうね、膝まで届くやうな！　私は永いこと思ひ切れませんでした……、あんな髪を……けれど、どうして梳いたりなんぞできません？　こんな境遇で……ですから私は切つてしまつたのでござい

ます、……さう……それでは、さよなら、旦那様！　もうお話ができません……。」

その日、獵に出かける前に、私は農園の監督とルケリヤの話をした。私は監督からルケリヤが村では『生神様』といはれてゐること、あんな風でゐながら少しも村の人に厄介をかけること、また愚痴や不平を聞いたことがないことなどを話された。「自分では何をしてくれとは申しませんが、それであつて、何をしても有難がるのです。まあ、素直な人、本當に素直な人といはなければなりません。神様から、かういつて監督は言葉を結んだ。「罪があつたために打ちのめされたのだと思ふ人もありませんが、私どもはさうは思ひません。まあ、かりに、罪があるかないかを決めるとしたら——いや、私どもはそんな詮議は致しません。そつとして置くことです！」

数週間の後に、私はルケリヤが亡くなつたといふことを聞いた。つまり死神が後から、……しかも『ペトロフキが濟んでから』やつて来たのである。人の話によると、臨終の日、ルケリヤは絶えず鐘の音を聴いてゐたといふ、——アレクセエフカから教會までは五露里の餘もある上に、その日は日曜日でも祭日でもなかつたのに。それにしても、ルケリヤはその音が教會からではなく、『上から』聞こえて来ると言つたさうだ、——おそらく、彼女は敢へて『天から』とは言

はなかつたのであらう。

音がするー

る す が 音

「ちよつと申し上げて置くけんど、」とエルモライが小舎の中へ入つて来て言つた、——私は食事を終へたばかりで、かなり獲物はあつたけれど、松鷄をさんざんに追ひ廻して疲れたので一寸やすまうと思つてキャンプ用のベッドに横になつたところであつた、——頃は七月の中旬で、暑さは厳しかつた……「申し上げて置くちふのは、彈丸がみんななくなつてしまつたことです。」

私はベッドから跳ね起きた。

「なくなつたつて！ そりや又、どうして！

村から大かた三十フントも持つて來たんぢやないか！ 袋一杯」

「そりやさうでがす。大かい袋でやんしたから、二週間分はたつぷりありやんした。でもどういふ譯だかさつぱり分かんねえ！ 縦びでも出來ましたかな。何せ、全く彈丸はありましねえ、……それでも十發くれえは残つてまさ。」

「ぢやどうしたもんだらうな？ 一番いいところを前に控へてて、——明日は雛つ子をつれた

のを六組くらゐは間違ひなしな譯だつたが……」

「それぢやトウラまで遣つて下せえ。ここからは遠かありません、みんなで四十五露里でさ。行つて来いつて仰つしやりあいきに飛んでつて、彈丸もつて来まさ、一ブードくれえ。」

「でも、いつ行かうて言ふんだ？」

「今すぐでも。ぐづぐづしちやらんねえでせう？ ただ一つ、何ですな、馬を頼まなくちやなりませんめえ。」

「どうして馬を雇ふんだ！ こつちの馬ぢや駄目なのか？」

「こつちの馬ぢや行けましねえ。軸馬め、跛をひき出しちやつたもんですからね、……ひどく！」

「いつから、そんなになつたのか？」

「そらあ、こないだ、別當が蹄鐵打ちに連れて行きやんしてね。それで蹄鐵は履かせましたのが。鍛冶屋が運わるく下手くそだつたと見えましてね。今ぢや、そろそろ踏むこともできまじねえ。痛めてるなあ前足でしてね。そいつを奴あ擧げたつきりでさ、——犬みてえに。」

「それで何かい？ せめて蹄鐵だけは脱つてやつたらうな？」

「いんえ、まだ脱りましねえ。でも、どうしたつて、脱がしてやんなくちやなりません。釘が

きつと肉ん中へぶち込まれてるんでやんせう。」

私は馱者を呼んで來させた。エルモライが嘘をいつたのでないことが分かつた。軸馬はたしかに足をつけることができなかつたのである。私は直ぐに蹄鐵をとつて、濕つた粘土のうへに立たして置くやうにと言ひつけた。

「それで、どうでやんせう？ 馬を雇つてトウラへ行けと仰つしやるんでやんせうか？」とエルモライは私にうるさく付きまとふ。

「だつて、こんな邊鄙なところで馬が雇へるのかい、一たい？」と、私は思はず、じれつたくなつて嘔鳴りつけた……。

私たちのゐた村は人の目にもつかないやうな、人煙稀れなところで、村の住民は悉く一文無しらしかつた。私たちは一軒の——煙突附の煖爐があるといふのではないが、——それでも多少とも広い小舎を見つけるのに、かなり骨が折れた。

「雇へまさ、」とエルモライはいつものやうに平然として答へる、「この村あ旦那の仰つしやる通りでやんすけん、そんなに仰つしやられるこの村に、一人の百姓が居りやんしてね。えらい利口な奴で、大盡でがしたよ！ 馬を九匹も持つてやんして。そいつはもう死んぢまつて、總領息子が後を全部やつてますがね。こいつは馬鹿の馬鹿の大馬鹿でやんすけん、まあだ親父のこ

せえた身上を棒に振るといふほどでもありやんせん。あいつに頼んだら馬あ出来ませえ。よけりや行つて連れて来ませ。あいつの舎弟は抜け目がねえ奴等ださうだけんど、……やつぱり、あいつが頭でやんすかんね。」

「そりや又どうして？」

「どうしてつて、——一番の總領でがせう？ つまり年の下な奴あ——言ふこと聽かなくちやなんねえんだ！」と言つてエルモライは一體に弟といふものに對して、筆も及び難いほどの氣焔を吐いた。「あいつを連れて来ませ。あいつはお芽出たい奴だから、口説きおとせねえことはねえでがせう？」

エルモライが彼のいはゆる『お芽出たい』男を呼びに行つてゐる間、私はいつそ自分でトゥラへ出かけて行つた方がよくはないかといふ考へを起こした。第一に私は今までの經驗に徴してエルモライをあまりあてにはしてゐなかつたのである。或るとき、町へ買物にやつたところ、一日のうちにすつかり頼んだことを果すといふ約束をして行きながら、一週間も行方を晦まして、金は残らず飲んでしまひ、行きには馬車で行つたものが、歸りには歩いて歸つて来たことがあつた。第二には、私はトゥラへ行けば知合ひの博勞がある。だから、馬を一匹その男から買つて、跋をひいてゐる軸馬に代へようと思つたのである。

『それに決めた！』と私は考へた、『自分で行つて来よう、途中でも眠れるのは眠れるし——幸ひ、この旅行馬車は寢心地もよいことだし。』

「連れて参りやんした！」とエルモライは十五分ほど経つてから小舎に駆け込んで来て叫んだ。後ろからは白い観衣を着て、青い股引に木の皮沓をはいてゐる背の高い百姓が入つて来た。眉も睫も白つぽく、眼が弱く、楔形の赤髯に長い膨れた鼻をして、ぼかんと口を開けてゐる。彼はたしかに『お芽出たい男』に見える。

「ほら、旦那、」とエルモライがいふ、「この男あ馬もつてますよ、——して、言ふことを肯いたんでさ。」

「さよで、はい、私は、……」と百姓は少し噎れた聲で、もちもちしながら言ひ出した、薄い髪の毛を振つて、手に持つてゐた帽子の縁を爪ぐりながら……「私は、はい……」

「お前の名は名ていふ？」と私は訊ねた。

百姓は俯向いて、じつと考へてゐる様子であつた。「私の名前でござえますか？」

「うん、何ていふんだ？」

「まあ、私の名前は——フィロフェーでせう。」

「それぢや、どうだね、フィロフェー、お前んどこに馬があるさうだね。三頭のを一組ここへ持つて来てくれまいか、——それを私の馬車へつけるんだがね、——なあに、馬車は軽いんだ、——そしてトゥラまで案内してくれまいか。丁度、今は月夜で明かるいし、乗つてゆくのにや涼しいし。ところで、こつちの方の道はどうかた？」

「道でやんすか？ 道は——何ともありません。本道までは二十露里はありやんせう、——全部で。ただ、ほんのひとところ……無氣味なところがありますけれど、ほかには別に大したことはありません。」

「無氣味なところつてどんなところかね？」

「へえ、小さい川の淺瀬を越さなきやなりませんのでな。」

「では旦那、御自分でトゥラへ行くんでやんすか？」とエルモライが聞き質す。

「さうさ。」

「へえ！」と言つて私の忠實な下僕は頭を振つた。「へえい！」と繰り返して、唾を吐くなり、外へ出て行つた。

トゥラ行きが最早エルモライの眼に全く魅力を失つてしまつたことが、ありありと見える。エルモライにとつては、つまらない、面白くも何ともないことになつてしまつた。

「道をよく知つてるかい？」と私はフィロフェーを顧みた。

察するところ、エルモライはフィロフェーを雇ふのに、この男は馬鹿であるからといふので、金は拂ふ……と、ただそれだけのことをいつて、その上よく納得の行くやうに言つてやらなかつたらしい！ フィロフェーは馬鹿は馬鹿でも、——エルモライの言葉だが、——ただそれだけの話では得心が行かなかつた。そこで彼は手形で五十ルーブリくれと私に要求した、——まことに法外な値段である。私はもつと廉く——十ルーブリならば出さうといつた。私たちは値段の駆引きをやり出した。フィロフェーは初めのうちは頑強であつたが、——やがて、だんだんとはあるが讓歩して來た。ほんの一寸の間、エルモライが入つて來て私に口添へし始めた、「この馬鹿は——（といふと、フィロフェーが「あれ、また十八番が始まつた！」と低い聲でいつた）この馬鹿は錢勘定をまるで知んねえんですよ。」といつて、序でに、私の阿母さんが二つの街道の行き合ふ通りの多い場所へ建てた旅館が、二十年ほど前に、全く不振に陥つたことを持ち出して、それといふのは番頭にして置いた年寄の下僕が、まるで錢の勘定を知らずに、數さへ多ければ餘計なのだと考へてゐたからで、——つまり一例をとつていふと、五カペイカの銅貨を六枚やるべきところを二十五カペイカ銀貨一枚やつて、しかも散々に悪態をつくといふやうな始末だつたからだと説明した。

「やい、てめえ、フィロフェー、本當のフィロフェー！」と遂にエルモライが呼び立てた——が、腹立たしげに戸をびしやりと閉めて出て行つた。

フィロフェーはさういはれても何の口答へもしなかつた。彼はフィロフェーと呼ばれるのはたしかに餘り氣の利いたことではない、これは洗禮の時に當り前の名前をつけてくれなかつた坊さんが實際に悪いのだ、さうはいふものこんな名前をつけてゐられる以上は、馬鹿にされても仕方がないと觀念してゐるらしかつた。

それでもたうとう私たちは二十ルーブリといふことで話がついた。フィロフェーは馬を連れに歸つたが、一時間ほど経つて擇りどりのできるやうに五頭つれて來た。馬は鬣や尾がひどく纏れて、腹は大きく、太鼓のやうに張つてゐたが、なかなか躰けのいい馬であつた。フィロフェーと一しよに二人の弟もやつて來たが、二人とも兄には少しも似てゐなかつた。小づくりで、眼が黒く、鼻の尖つた者でもで、たしかに『抜け目のない』奴だといふ印象を與へる、——早口に盛んに話をする。エルモライの言ひ草だと『ほざく』のである。けれども兄のいふことはよく聴いてゐた。

彼等は檐の下から馬車を引き出して、一時間半ほどは車と馬にかまけてゐた。綱の挽索をゆるめたり、それをしつかりと、更にしつかりと締め直したりした。二人の弟は『葦毛』を軸につけ

よう切りに望んでゐた。そのわけは『きやつは下り坂が得手だから』といふのであつた。しかし、フィロフェーは『老毛』の方に決めてしまつた。そこで老毛が軸馬としてつけられた。

馬車には干草をぎつしり詰めて、腰掛の下には跛になつた軸馬の頸圈を入れた、——それはトゥラへ行つて新しく買ふ馬につける必要があつた場合の用意である、……家へ駈けて行つたフィロフェーは長い白い親ゆづりの上衣を着て、高い麥稈帽子をかぶり、油を塗つた長靴をはいて戻つて來たが、いとも嚴かに馭者臺に上つた。私も時計を見ながら座についた。十時十五分過ぎであつた。エルモライはわかれの挨拶もしないで、自分の犬のワレットカをしきりに打ちのめしてゐた。フィロフェーは手綱を引き絞つて、細い細い聲でいつた、「やい、こら、畜生！」——弟たちは兩側から駈け寄つて、添馬の腹を鞭うつた。すると馬車は動き出した。門を出て通りへ出ると、老毛が自分の家の方へ向かうとしたが、フィロフェーが鞭を五つ六つ呉れて性根をつけた、——と見る間に、もう私たちは村を出はづれて、繁つた胡桃の林が兩側につづく、かなり平らな道に出てゐた。

靜かな、すばらしい、馬車を驅るには極めて良い晩であつた。風は低い木立をさらさらと吹き過ぎて、枝を揺るかと思へば、聲もなく靜まりかへる。空にはあちこちに、じつと動かぬ銀色の小さな雲が見えて、月は高く皎々とあたりを照らしてゐる。私は干草のうへに身を伸ばして、

もう微睡みかかつてゐた、……が、ふつと『無氣味な所』のことを思ひ出して、ぶるぶると身慄ひした。

「おい、どうだ、フィロフェー？ 浅瀬まではまだ遠いのか？」

「浅瀬までですか？ 八露里くらゐありやんせう。」

「八露里、」と私は考へた、『して見ると、そこまで行くには一時間ではむづかしい。まあ、一寝入りできる。』そこで私はまた訊いた、「おい、フィロフェー、道はよく知つてるんだらうな？」

「だつて、どうして、それ、知んねえことありませう、道を？ 初めて来る譯ぢやありませんか、えのに……」

それから何やら言つてゐたが、もう私の耳には入らなかつた……私は睡つてしまつてゐた。

よくあることであるが、恰度一時間で起きるつもりでゐながら、眼は覺めなかつた。一種奇妙な、幽かではあるが、びしゃびしゃ、ごうごうといふ音が寢てゐる耳の下で聞こえて来て、やうやく眼が覺めた。私は頭をあげた……。

何ていふ不思議なことだらう？ 相變らず馬車の中に寢てはゐるが、馬車のまはりは——その縁から一尺あまりの所まで来てゐる水のおもてが月の光りに照らされ、ちらちらと細かな明かる

い漣をよせてふるへてゐる。前を見ると、鼠者臺には頭を垂れ、背を屈めて、彫像のやうにフィロフェーが坐つてゐる、その向ふには、さわさわと音を立つてゐる水のうへに、靴の歪んだ線と馬の頭と背と。——ありと凡ゆるものが凝然と、音もなく、——まるで魔法の國か夢のなか、お伽噺の夢のなかにでも居るやうだ……。これは一體どうしたわけだらう？ 私は馬車の蓋ひの下から見かへつた……。私たちは河の眞ん中にゐるのである、……岸までは三十歩もある！

「フィロフェー！」と私は叫んだ。

「何ですわね？」と言葉を返す。

「『何ですわね』もないもんだ。冗談ぢやありませんか！ ここは一體どこだ？」

「河ん中でさ。」

「河ん中だからゐるは知つてるよ。だけど、かうしてゐちや沈んぢまふ。お前はいつも、かうして浅瀬を渉るのか？ え？ 何だ、お前は眠つてるんだな！ おいこら！」

「ちよいと間違ひました、」と私の馭者はいふ、「片つ方へ寄り過ぎましたの、たしかに悪いことしました。けれど、まあ暫く待つてた方がええでさ。」

「何だ、暫く待つてた方がいいつて！ 一體何を待つんだ？」

「へい、實は是にそこらを見させるんでして。奴が動いた方へ、その、行つたらええといふ譯

でやんす。」

私は干草のうへに起き直つた。軸馬の頭は水の上に全く動かずにゐる。ただ明かるい月の光りに、片方の耳がきはめて微かに、前後に動いて居るのが見えるばかりである。

「おい、奴も眠つてるんだな、老毛も！」

「いんえ、」とフィロフェーが答へる、「奴はいま水を嗅いでるんでやんす。」

また何もかもが静まり返る。ただ相變らず幽かにせせらぎの音がきこえる。私も亦ぼんやりしてしまつた。

月の光りと、夜と、川と、流れのなかにゐる私たちと……。

「あの覆れた聲は何だらう？」と私はフィロフェーに訊いた。

「あれかね？ あれあ輩ん中にゐる鴨でさ、……でなけりや蛇でさ。」

俄かに軸馬の頭が揺れる。兩方の耳がびんと立つ。軸馬は鼻を鳴らして、動き出す。「はい、はい、はい、ほうい！」と、フィロフェーが俄かに有らん限りの聲を絞つて喚き立て、少しばかり伸びあがつて、鞭を振り始める。馬車は直ぐに停まつてゐた場所から引き離されて、前へ前へと川の流れを押し切り、がたがたしたり揺すぶれたりしながら進んで行つた……。初めのうちは、だんだんと深く沈んで行くやうに思はれたが、二三度がたついたり、窪みに落ちたりした後は、

水面が急に低くなつたやうに思はれた……。水面はいよいよ低く低くなつて、馬車は水の中から生まれて来たやうだ、——そのうちに早くも車輪と馬の尻尾が見えて来た。今度は威勢よく大きな飛沫を、数しれぬダイヤモンドのやうに——いや、ダイヤモンドのやうにはなく——碧玉のやうに、月の朧ろげな光りの中に雨と降らしながら、馬は樂しげに力を合はせて、私たちを砂の多い川岸に引き上げ、月に輝く濡れた足をしどけなく運びながら、山の方へと道をとつて行つた。

『さて、フィロフェーが、』と、ふと私は考へた、『何ていふだらう。(言はんこつちやないでせう！)』とか何とか、さういつたやうなことを言ふだらう』と。ところが彼は何も言はなかつた。そこで私も彼の不注意を責め立てるには及ばないと考へて、干草の中に横になり、もう一度ぐつすり眠らうと試みた。

しかし、私は眠れなかつた、それは獵の疲れが出てゐなかつたからでもなく、今わたしが経験して来た不安な氣持が眠氣を逐ひ拂つてしまつたからでもなく、實は今まことに美しいところを走つてゐるからであつた。見れば、豊かな廣々とした、青々しい、肥沃な草原で、——その中には無数の小さな草場があり、沼や小川、入江などがあり、その盡きるところには柳の林や水楊の繁みがある、——それはいかにも露西亞らしく、露西亞人の好きな所で、わが國の古い傳説にあ

る勇士たちが馬に跨がつて眞白い白鳥や灰色の鴨を撃ちに行つた所を思はせる。往き通ふ馬車の轍に均らされた道は黄ばんだリボンのやうにうねつてゐる。馬は足並かろく走つて、私は眼を合はせられなかつた、——私は全くこの景色に見とれてゐたのである！ しかも、凡ゆるものが、なつかしい月の光りをうけて、いと軽らかに、心地よく、浮かんでは行き過ぎる。フィロフェーもまた、これには感心してゐた。

「ここらは聖イエゴルの草つ原つて言ふんでき、」と彼は私を顧みた。「それから、この向ふに大公の草つ原つていふのがありますけど、こんな草つ原は露西亞中どこへ行つたつてありやんせん……、いやはや、どうもいい景色だなあ！」軸馬は鼻を鳴らして、胸震ひした……。「馬鹿なことするもんぢやねえよ！……」と眞面目くさつて聲低くフィロフェーがいふ。「どうもいい景色だなあ！」と繰り返して溜息をつき、それから長々と喉聲を出した。「もう直き干草刈りも始まりやんすけど、どのくれえ干草を掻き集めることだか、——大へんなもんだ！ 入江にや魚が又うんとゐるし。こんな鯉が！」と長く引つづつて附け足した、「とにかく、世の中は死ぬがものはねえんでき。」

彼は不意に片手を舉げた。

「ほう！ 御覧なせえ！ 沼のうへに……あそこに立つてるのは青鷺かな？ 青鷺は夜でも魚

を取るもんでやんすか？ あれ、まあ！ あれは木の枝だ、青鷺ぢやなかつた。やあ、間違つた。どうにもお月様にや、いつも騙される。」

こんな工合で私たちは先へ先へと進んで行つた……。が、もう草原のはづれに行き着いて、小さな林と耕された畑が見えて来た。一方には小さな村があると見えて、二つ三つの灯をちらちらさせてゐる、——もう本道までは五露里ばかりしかなかった。私はぐつすり眠つてしまつた。

私はまたもや自分では眼が覺めなかつた。今度はフィロフェーの聲で起こされた。

「旦那、……あの、旦那！」

私は起きあがつた。馬車は街道の眞ん中の平らなところに立つてゐる。フィロフェーは馭者臺のところから私の方へ顔を振り向け、大きく眼をあけて（私はこの眼を見て驚きさへもした。今まで彼がこんなに大きい眼をもつてゐようとは夢にも思はなかつたのだ）、——意味ありげに、妙な聲で囁いた。

「音がする！……音がする！」

「何だつて？」

「音がするつて言ふんです！ 屈んで聞いて見さつせえ。聞こえやんせう？」

私は馬車から頭を出して、息を殺した。すると、たしかにどこか遠くの方——私たちよりは

つと後ろの方——から車輪の音らしい微かな途切れ途切れの音が聞こえて来た。

「聞こえやんせう？」とフィロフェーがまた言ふ。

「うむ、聞こえる、」と私は答へる、「何だか、馬車が来るやうだ。」

「あゝ、聞こえねえんですか……ほら！ 小鈴……の音に……口笛ふいて……。聞こえやんせう？ 帽子をとつて見さつせえ、……もつとよく聞こえるから。」

私は帽子はとらなかつたが、耳を澄ました。「うむ、なるほど、……さつかも知れん。けど、あれがどうしたつていふんだ？」

フィロフェーは馬の方へ顔を向けた。

「馬車が来る……荷物もつけずに、鐵の輪の車輪くるまだな、」と言つて手綱を取り上げる。「あれあ、旦那、悪い奴が来るんですよ、こちらのトゥラ近邊いんたつちや、悪戯いたづらしやがるんですよ……よく。」

「馬鹿な！ どうしてあれが悪い奴に相違ないなんて思ふんだ？」

「わしの言ふのは本當でがさ。——小鈴をつけて、……それから空車からぐるまに乗つて、……誰が来るもんですか？」

「ふむ——それはさうと、トゥラまではまだ遠いのか？」

「まだ十五露里はあります、ここにや一軒だつて人の住んでる家はねえし。」

「それちや、もつと早くやれよ、愚圖愚圖してたつて仕様がなない。」

フィロフェーが鞭を振ると、馬車はまた動き出した。

決してフィロフェーのいふことをそれほど信用したわけでもないが、私はもう寝つかれなかつた。——『若し實際にさうだつたらどうしよう？』——不愉快な氣持が私の中に動き出した。私は馬車の中に坐つて、——その時までには横になつてゐたが、——四方を見廻し始めた。私が眠つてゐた間に、地上にこそ降りて來ないが、淡い霧が空に立ちこめて來た。それが高く立ちこめてゐるので、月はその中に乳色の一輪となつてかかり、まるで煙の中にもあるかのやうだ。地面に近いところは割合にはつきりしてゐるが、凡ゆるものが朦朧として、區別がつかなくなつてゐる。見わたす限り平らな寂しいところである。畑、どこもかしこも畑で、ところどころに叢くさむらがあり、谿たにがあつて——又しても畑があるが、大ていは休ませてあつて、僅かばかりの雜草などが生えてゐる。死のやうな……空虚！ せめて鶉ひよこでも一こゑ鳴けばよいものを！

私たちは半時間ほど進んで行つた。フィロフェーは絶えず鞭を振つたり、舌打ちをしたりしたが、二人とも一言も口をきかなかつた。そのうちに、やうやく丘の上に登り切つた……。フィロフェーは三頭の馬をとめて、すぐに言つた。

「音がする……音が……する、旦那！」

私はまた馬車の外へ頭を出した、が、蔽ひの庇の下にじつとしてゐてもよかつた。それほど、今はまだ遠くからではあるが明瞭に馬車の車輪の音、人の口笛、鈴のからからと鳴る音、それに馬の蹄の音さへも聞こえて来た。歌をうたふ聲や笑ひ聲さへも聞こえるやうな気がする。風は確かにそちらから吹いてゐるのであるが、見知らぬ旅人がせいぜい一露里、ひよつとしたら二露里くらゐはこちらへ近づいて来たことは事實である。

フィロフェーと私とは互ひに顔を見合はせた、——彼はただ帽子を後ろから額の方へぐいと引つ張り、手綱にのしかかるやうにして矢庭に馬を鞭うち出した。馬は一目散に駆け出したが、永續はせずに、又もや跣足になつてしまふ。フィロフェーは續けざまに鞭をくれる。どうしても逃げなければならぬ！

私は初めのうちこそフィロフェーのやうに何も不審の念を懐かなかつたのであるが、どうしたわけか今度といふ今度は、確かに後ろからは悪い手合ひがやつて来るのだと、急に思ひ込んだ……。別に新しい物音が私の耳に聞こえて来た譯ではない。同じやうな鈴の音、同じやうな空車の音、同じやうな口笛、同じやうな騒ぎ……。しかし、私はもう疑ひを持たなかつた。フィロフェーに間違ひのあらう筈はない！

さて、また二十分ほど経つた……。この二十分が終らうといふ頃になると絶えず私たちの車がごろごろ、がらがらと軋る音にまじつて、他の車がごろごろ、がらがらといふ音が聞こえて来た……。

「停まれ、フィロフェー、」と私は言ふ、「どつちにしたつて同じことだ、——どうせ、やられる時はやられるんだ！」

フィロフェーは怖る怖る「どう！」と言ふ。馬はいき休めるのを喜んでゐるかのやうに、びたりと停まる。

さあ大變だ！ 小鈴はすぐ後ろでしきりに鳴つてゐる。車がごろごろと鳴る。人が口笛を吹く、叫ぶ、唄ふ。馬が鼻を鳴らす、蹄で地面を打ちつける……。

追ひつかれてしまつた！

「困つちやつたなあ、」と悠長に低い聲でフィロフェーがいふ、——そして思ひ切り悪さうに舌打ちして、もう一度馬を勵ましかかる。が、その瞬間に不意に何物かが、すさまじい唸り聲をあげて飛び出して来る、——と思ふ間もあらず、大型の幅の広い馬車が、瘦せて筋張つた三頭の馬に曳かせて、忽然と旋風の如くに私たちに追ひ付いて、そのまま前へ駆け抜けたが、直ちに並足になつて、行く手を遮つた。

「全く追剽のお株だ。」とフィロフェーが呟く。

正直のところ私はひやりとした……。それでも氣を張りつめて、霧に蔽はれた薄暗い月明りの中を見まもつた。前の馬車の中には、坐つてゐる者、横になつてゐる者、六人の男が襦袢を着て、粗末な上衣の胸をはだけてゐる。二人は帽子もかぶらず、長靴をはいた大きな足が横の板にかかつてぶらぶらしてゐる、腕は矢鱈に上つたり下がつたりして……。身體は前後にぐらついて……。確かにこれは酔ひどれの仲間だ。出鱈目に喚いてゐる連中があるかと思ふと、一人はかなり鋭く、朗らかに口笛を吹き、もう一人は惡態をついてゐる。馭者の坐るところには膝きりの毛皮の外套を着た大の男が一人ゐて、手綱をとつてゐる。彼等は私たちには目もくれないかのやうに、悠々と馬を驅つて行く。

どうしたらよいのか？ 私たちもまた悠々と後について行つた、……澁々と。

二丁ばかりはこんな風にして進んで行つた。何かさげすまないかと待つてゐるのは辛かつた……。まぬがれる、自分の身を護る……。そんなことは、もう問題にはならないのだ！ 相手は六人、こちらはステッキ一本もつてゐない！ 引き返さうか？ 引き返したところで直ぐに追ひ付かれてしまふにきまつてゐる。ふと私はジュコオフスキイの詩（そこで彼はカマメンスキイ元帥の非業の死を歌つてゐる）を思ひ出した。

賤しむべき賊徒の斧は……

さもなれば汚れた繩で首を絞められる、……溝に投げられ、……聲は嘎れ、毘にかかつた鬼のやうに跳くのだ……。

ええい、見られた態ぢやないんだ！

彼等は相變らず悠々と、私たちには眼もくれずに行く。

「フィロフェー！」と私は囁いた、「やつて見な、もつと右へ寄せて通り抜けられるかどうか。」

フィロフェーはやつて見た、——右へ寄せた……。けれど向ふもまた右へ寄せる……。通り抜けることはできない。

フィロフェーはもう一度やつて見た。左へ寄せて見た、……。しかし、向ふはまた馬車を通させない。おまけに奴等は笑ひ出した。道を通さないぞといふ意味である。

「いよいよ追剽に相違ねえ、」とフィロフェーは肩越しに私に囁く。

「けど何を待つてゐるんだらう、あいつ等は？」と私もまた小聲で訊いて見た。

「ついその先の……窪地の……川のうへの……橋……あそこで私らをどうかするんだ！ いつ

もその手だかんね……、橋のそばで、どうせ、もう分かり切つてまさ、旦那！」かういつて彼は溜息まじりに言ひ足した、「とても生かしちや歸しますすめえ。何しろ、ばれねえやうにするのが大事ですかんね。たつた一つ、口惜しいことがあるんですが、旦那、この馬がなくなると舎弟らはもう馬あ持てねえんです。」

私はかう聞いて實に驚いた、こんなときにフィロフェーがよく馬のことなどを氣にかけて居られるものだ。——たしかに正直をいふと私はフィロフェーのことなど一寸も考へてはゐなかつたのである……。「やつぱり本當に殺されるのか？」と、私は心の中で繰り返してゐたのである。「何のために殺されるんだ？ 持つてゐるものは残らずやるのに。」

しかも、橋はいよいよ近くなつて、次第に、はつきりと見えて來た。

不意に鋭い鬨の聲が聞こえた。前の三頭馬車は疾風のやうに突進して橋のところまで行くと、少しばかり道のわきへ寄つて、一氣にびたりと停まつてしまつた。私の心は全く沈んでしまつた。

「あゝ、フィロフェー兄哥、」と私はいつた、「もう死ぬばかりだ。勘忍してくれ、おまへをこんな目に遭はして。」

「何であんたの罪科なもんですか、旦那！ 持つて生まれた運ちふものは仕様がねえ！ さあ、怒、いいかえ、頼みだぞ」とフィロフェーは軸馬に言葉をかける、「やつてくれよ、な！ これが

おしまひの奉公だぞ！ どつちにしろ命がけた、……もうこの先は……天命だぞ！」

そこで彼は三頭の馬を勵まして跑を駈けさせる。

いよいよ橋の方へ近づいて來る、——じつとしてゐるあの戦慄すべき馬車の方へ……。馬車の中は故らしく静まりかへつてゐる。うんでもなければ、すんでもない！ 梭魚や兀鷹、その他あらゆる猛獸が獲物に近づく時の静けさだ。——いよいよ私たちは向ふの車と一列に並んだ。すると、いきなり膝きりの外套を着た大男が馬車の上から飛んで降り、つかつかと私たちの方へ向つて來た。

何一つこの男がフィロフェーに口をきいたわけではなかつたが、フィロフェーの方では直ぐに、ひとりでに手綱を引つぱつた……。馬車は停まつた。

大男は馬車の戸に兩手をかけて、——毛むくぢやらの頭を前に傾けて、作り笑ひをしながら、静かな流暢な聲で、職人風な調子で次のやうなことをいつた。

「旦那え、わし等あ、眞面目な酒盛からの歸りでございます。祝儀がありましてね。仲間の色男を縁組さしたといふ譯で、つまり、床入りをさせたんでござんす。わし等あ、若いものばかりで、向ふ見ずな奴等でして、しこたま酒は飲みましたが、後口が何もねえといふ譯でして、いーかがでございます。旦那、仲間、仲間に火酒の半瓶づつも飲ませるだけ、ほんのちよつぱり惠んでやつて下

「せえませんか? さうすりやあ、あなた様の健康を祝して乾杯を致しまして、決して旦那さまの事お忘れませんが、——だが、若し、お厭だもありやあ、——まあ、御立腹なさらんで下せえ!」

『これは何のことだらう、』と私は考へた……『冗談か? 嘲弄か?』

大男は頭を下げたまま、相變らず佇つてゐる。丁度このとき、月は霧のなかから現はれて、彼の顔を照らした。顔には薄ら笑ひが浮かんでゐる、——眼にも、口もとにも。けれども別に人を脅やかす風も見えぬ……、ただその顔は絶えず用心をしてゐるかのやうに思はれる、……そしてかなり白い大きい歯が……。

「お安い御用です、……これを上げませう……、」と私は急いで言つて、ポケットから財布を引き出し、ルーブリの銀貨を二枚とり出した、——その頃はまだ銀貨が露西亞で通用してゐたのである、「さあ、これで澤山だつたら……」

「大きに有難うござんす!」と大男は兵卒のやうに大きな聲で叫んだ。そして肥つた指が瞬くうちに私の手から——財布ごとではなく、——たつた二ルーブリだけをつかみ取つた。「大きに有難うござんす!」彼は髪を振つて、自分の馬車の方へと駈けて行つた。

「おい、みんな等!」と叫んだ、「旅のお方が銀貨を二ルーブリ下すつたぞ!」すると一同は立ちどころに聲さわがしく笑ひ出した、……大男は馭者臺に轉がるやうに上つた……。

「旦那、御機嫌よう!」

それきり彼等は見えなくなつた! 馬が勢ひよく駈け出して、相手の馬車はがたがたと音を立てながら、山を登つて行つた、——もう一度、空と地の相接する暗い線のうへにちらちらしたが、山を降りて消えてしまつた。

そしてもう車輪の音も、喚きこゑも、小鈴の音も聞こえなくなつた……。
あたりは息が絶えたかのやうに、ひっそりしてしまつた。

* * * * *

フィロフェーも私も、暫くは生きた空もなかつた。

「あゝ、ふざけた奴だ!」と遂にフィロフェーが口を切つた、——そして帽子をぬいで十字を切り出した。「ほんとに、ふざけた奴だ、」と言ひ足し、すっかり嬉しきうな顔をして私の方を向いた、「けんど、氣だての好い奴に違えねえ、——全く。ほい、ほい、ほい、こら! 急げ! 大丈夫だ! みんな大丈夫だぞ! 通せん棒したのもあいつで、馬を御してたのもあいつだ。ふざけた野郎だな! ほい、ほい、ほい、ほい、ほい!——さあさあ、さつさと行くんだぞ!」

私は黙つてゐた——けれど、私も心の中では嬉しかつた。『大丈夫だ!』と、獨り言をいつて

干草のうへに横になつた。「あゝ、安くて済んだ！」
 今となつてはジュエオフスキイの詩の一節を、どうして思ひ出したのかと恥かしくさへもなつて来た。

ふと私は思ひついたことがある。

「フィロフェー！」

「何ですわね？」

「おまへ、女房はあるのかね！」

「あります。」

「子供は？」

「子供もありません。」

「一體、どうしてお前、それを思ひ出さなかつたんだね？ 馬のことばかり惜しがつて、——女房のことだの、子供のことは？」

「だつて惜しがるがものはねえでせう？ 奴等あ泥坊につかまる氣遣ひがあるんぢやなし。けんど、いつも頭ん中にや、ちやんと入れときましたんで。——今でもやつぱり……そりやもう。」
 フィロフェーは暫く口を噤んだ。「多分……神様あ婢子供のためを思つて、儂等を助けてくれた

んでやんせう……。」

「だが、あれが追剥でなかつたらどうだらうな？」

「それや分かるもんですかね？ 他人の心ん中へ、入るわけにや行かねえぢやありませんか？

他人の心つちふもんは——なんてつても——分かるもんぢやねえ。でも神様せえ信心してりや物事あ何時だつてうまく行くもんだ！……いや、……わたしや何時でも家族のことを……。ほい、ほい、ほい、こら、さつさと行け！」

私たちがトゥラの町へ入りかけた頃には夜はもう殆んど白んでゐた。私は横になつて半ば睡りながら、何もかも忘れてゐた……。

「旦那、」と突然フィロフェーがいつた、「あれ、御覽なせえ、むかふの居酒屋に奴等あ留まつてますよ、……奴等の馬車があるし。」

私は頭をあげた、……見ると確かに奴等である。馬車もゐる。馬もゐる。酒屋の敷居のところへ例の膝きりの外套を引つかけた男が不意に現はれた。「旦那！」と彼は帽子を振りながら大きな聲で呼びかけた、「旦那のお金で飲んでるところです！——やあ、別當さん、」とフィロフェーの方へ頭を振つて附け足した、「どつだい、多分、こんねにびくびくしてたろ？」

「とても面白い奴だなあ、」と二十間あまりも居酒屋のところから離れたときにフィロフェー

がいつた。

たうとうトゥラの町へ着いて、私は弾丸を買つた。序でにお茶も酒も買ひ、——おまけに博勞から馬まで買ひ入れた。——お午ごろにまた歸途についた。行きしなに後ろから馬車の音を聞きつけた邊までやつて來ると、トゥラで一杯ひつけて、極めて口が軽くなつてゐたフィロフェーは——お伽噺さへもやつてゐたが、——その邊を通り過ぎながら不意に笑ひ出した。

「覺えてるかね、旦那、しよつちゆう儂が『音がする……音がする、音がする！』つて言つてたのを！」

フィロフェーは何かを振り拂ふやうに、幾度か手を振つた。彼にはこの言葉が、ひどく面白いものに思はれたのである。

その晩、私たちは村に歸つて來た。

私は二人が出遭つた出來事をエルモライに傳へた。彼は眞面目くさつてゐて、別に同情の意も表しなかつた、——ただ『ふむ、ふむ』といふだけであつた——感心してゐるのか、非難してゐるのか、——これは思ふに彼自身にも分からなかつたらう。しかし彼は二日ほどして満足さうに、フィロフェーと私とがトゥラへ行つたあの晩、しかも同じ道で、どこかの商人が金をとられて、殺されたといふことを話して聞かせた。初め私はこの消息を信用しなかつたが、やがて信用しな

い譯には行かなかつた。エルモライのいつたことに間違ひがなかつたことは取調べのために馬を飛ばしてゐた分署長によつて裏書された。あの向ふ見ずの連中はこの大へんな『お祝儀』からの歸りではなかつたか、また、ふざけた大男の言葉でいふと、床入りをさせた『色男』といふのは、この商人ではなかつたか？ 私はその後、五日ばかりフィロフェーの村に滞在してゐた。——いづも彼に會ふや否や、私は「おい？ 音がするかな？」と言つたものである。すると彼はいつも「面白い奴でさ。」と答へて笑ひ出すのであつた。

エビローグ

森と曠野

いよいよに心ひかれぬ、
 かの村の暗き園生に、
 菩提樹の大樹の影の暗くして、
 鈴蘭の花、清らにも香はしく、
 圓き柳、堤より水のうへに、
 つらなり垂れて、
 ゆたかなる榭、ゆたかなる畑に生ひ立ち、
 大麻や蓼麻のほへるところ、
 思ひ寄す、かの村の廣き大野に

天鷲絨のごと、地は黒々と、
 見わたす限り、ライ麦の静かにも
 軽きうねりを寄せかへし、
 圓らかに白く透きいる雲間より
 重たくも黄色の光の落つるところ、
 かの村なれば、何もかもよき……

(火中に投ぜられたる詩篇の世より)

讀者はおそらくすでに私の手記に倦かれたことであらう。そこで取り敢へず私は今までに發表された斷片をもつて筆をとどめるといふ約束を果して、重荷をおろしていただかうと思ふ。然しながら、讀者と別れるに際して、なほ獵について數言を費やさないわけには行かないのである。鐵砲を肩にし犬をつれて獵をするといふことは、昔よくいはれたやうに *Für sich* それ自身すでに美しいことなのだ。が、諸君は生まれつき獵人ではないにしても、とにかく自然を愛して居る以上は、やはりわれわれ獵人仲間を羨まずに居られまいと思ふ……先づ聞いていただきたい。諸君は例へば春の夜明け前に出かける楽しさがどんなものか、御存じであらうか？ 先づ表の

階段に出る……。暗い灰色の空にはあちこちに星がちらつてゐる。しつとりとしたそよ風が時をり軽い波のやうに吹いて来る。忍びやかな、はつきりしない夜のささやきが聞こえる。蔭にまつまれた樹々が微かにそよぐ。そこで馬車には毛氈をかけ、足もとにはサモールをいれた箱が置かれる。添馬が身を震はす、鼻を鳴らす、氣取つた歩き方をする。今しがた、眼をさましたばかりの白い鶯鳥が聲も立てずに、のろのろと道を横切る。籬のむかふの庭園のなかには、番人がいと安らかに軒をかいてゐる。一つ一つの物音が凍みとほる空氣のなかに停まつてもゐるかのやうだ、停まつてゐて、流れないかのやうに。腰をかける。すぐに馬は動き出す。馬車は轆轤と轆り出す……。乗つて行く、——教會を過ぎ、山を下りて右の方へ、堤を越えて乗つてゆく……。池はやうやく煙りかける。いくらか冷え冷える。毛皮の外套の襟を立てて顔をかくす。うとうと睡たくなつて来る。馬は音高く水溜りをはねかして行く。馭者が口笛を吹く。ところがもう四露里ほどもやつて来てゐるのである……。空の涯が紅らんで来る。白樺の木立のなかに眼がさめて、不細工に飛び渡る鴉。雀が暗い稻叢のあたりで、ちちと鳴く。空氣は光り、道はいよいよはつきりと、空は澄んで、雲は白く、野は青々と。あちこちの小舎の中には木片が赤い火を發して燃えかがやく。門のむかふから睡たげな人の聲が聞こえる。さうかうしてゐるうちに朝焼の色が燃えあがる。早くも金色の縞が空にひろがる。谿には霧が巻きあがる。雲雀が聲うるはしく歌つ

てゐる。夜明け前の風が吹き出した。それからしづかに韓紅の太陽が浮きあがつて来る。水の流れのやうに光りが迸る。胸は小鳥のやうに羽ばたきする。何もかもが新鮮で、楽しく、なつかしく！ あたりは遠くまで見渡される。あの林のむかふには村がある。それから少し離れて白い教會のある村が一つ。その山には白樺の木立があつて、その後ろに、これから行く沼地がある……。もつと早く、馬よ、もつと早く！ 大きく、跑をふんで進んで行け！……まだ三露里ほどある、それより多くはない。太陽は忽ちに昇る。空は清らかである……。すばらしい天氣になるだらう。村から家畜の群れがこちらへぞろぞろとやつて来る。山に登る、……何といふ眺めであらう！ 川は霧の間にほんやりと青く、十露里も、うねりうねつてゐる。川のむかふにはみづみづしい緑の草原。草原のむかふには、なだらかな丘陵がつづいて、遠い沼地のうへには、田舎が鳴きながら飛んでゐる。空にあふれた、うるほひのある輝きの中に遠くの方がはつきりとあらはれる……。夏のやうではないけれど。人の胸はどんなに思ひのままに息づくことか、どんなに手足が軽々と動くことか、どんなに身も心も健かになることか、春の新鮮な息吹きにいだかれて！ さてまた夏の七月の朝！ 夜の明けぎはに、叢から叢とさまよひ歩くことが、どんなに楽しいものか、獵人なら誰がまた味はひ得るものか？ 足跡は露に白々とした草の上に緑の線を引いてゐる。濡れた叢を分けてゆく、——すると今まで貯へられてゐた温い夜の匂ひを浴びせかけら

れる。空気は苦蓬の新鮮な苦味や蕎麥や甘薺の蜜のやうな甘い香ひにしつとりとしてゐる。遠くには柵の森が城壁のやうに立つてゐて、日ざしをうけて輝き紅らんでゐる。まだ清涼しくはあるが、すでに暑さの近づいて来たことが感じられる。かぐはしい匂ひを一ぱいに浴びせかけられて、ぼんやりと眩暈がする。叢林は極まるころもなく……。ただ遠くところどころに熟れたライ麦が黄ばんでゐるのと、蕎麥が細い畝をなして赤らんでゐるのが見えるばかり、そこへ馬車が輾り出す。一人の百姓がこつそりと大股に歩いてゆく、暑さの来ないうちにと樹蔭に馬を引き入れる……。百姓は挨拶をして行つてしまふ、――すると後ろから大鎌のチンカンといふ爽やかな音が聞こえる。太陽はいよいよ高く昇る。忽ちに草は乾く。さあ、もう暑くなつて来た。一時間、二時間と過ぎて行く……。空は地平線に近いあたりは薄暗くなつて、動かない空気は、刺すやうな熱さに炎々と燃える。「おい、ここいらで何處へ行つたら水がたんと飲めるんだらう？」と、草を刈つてゐる人に訊ねる。――「そりやむかふの谿の中に井戸がありますよ。」蔓草の這ひまはつた、こんもりとした胡桃の林を通り抜けて、谿の底に下りてゆく。なるほど、断崖の眞下に泉が隠れてゐる。柵の一むらが水の上に、鳥の趾のやうな枝を貪るやうに張つてゐる。大きな銀のやうな水の泡が細かな、天鵞絨のやうな苔におほはれた底からゆらゆらと湧きあがつて来る。地べたに身を投げて、がぶがぶと水を飲む。すると、もう動きたくなくなる。樹蔭へ入つて香りの

高い露じめりを吸へば、快よくなつて来る。眼の前の叢林は日に燃え立つて、まるで黄いろに變つたやうだ。しかし、これは何であらう？ 風がゆくりなく吹いて来て、颯と吹き過ぎる。あたりの空気がふるへる。これは雷ではなかつたか？ 谿を出てゆく……。あの地平線のうへの鉛いりの筋は何であつたか？ 暑さが増して来るのか？ 黒い雲が湧き立つて来るのか？……。しかも今かすかに稻妻がひらめいた……。あゝ、これは雷雨だ！ あたりにはまだ太陽がきらきらと、光つてゐる。まだ獵をするにはできる。けれども黒い雲はむくむくと湧いて来る。雷雲の前の縁は袖のやうに伸びて、穹窿のやうに垂れて来る。草や灌木や、あらゆるものが暗くなる……。急げ！ むかふの方に干草小舎が見えるやうな気がする、……。さあ急げ！ 駈けつける。中に入る……。何といふ雨であらうか？ 何といふ稻妻であらうか？ そこに薬屋根を洩れて、雨水が香りの高い干草のうへに降りかかる……。が、もう太陽はまた照つてゐる。雷雨は去つた。外に出る。あゝ、どんなに楽しげに、あたりの凡ゆるものが輝いてゐることか、この空気の新鮮なこと、淡いことはどうだらう、白花蛇、毒や菌の香ひは……！

しかし、間もなく夕暮がやつて来る。夕映えの光りが炎々と燃え立つて、空を半ば掩つてゐる。陽は落ちかかる。そこらの空気は何かしら際立つて、硝子のやうに透きとほつてゐる。遠くにはやはらかな、見たところは温かさうな靄が立ちこめてゐる。ついさつきまで、淡い黄金の流れを

浴びてゐた野邊には露とともに眞紅の光りが落ちる。樹から藪から高い干草の山から長い影が走る……。陽は沈む。星が一つ點つて、日没の火の海にふるへてゐる……。今は火の海も色あせて、空は青み、くつきりした物の影も消えて、あたりは薄闇に閉ざされる。もう、一夜の宿をとるべき村の小屋へ歸る時刻だ。銃を肩にして、くたびれたにもかかはらず、さつさと歩いてゆく……。そのうちに夜がやつて来る。二十歩さきは見えぬ。かすかに闇の中に犬たちが白く見える。むかふの黒い林のうへに空の縁がぼんやりと明かるんでゐる……。あれは何だらう？ 火事かしら？ ……いや、あれは月の出だ。またその下の、右手の方には、村の灯がもうちらちらしてゐる……。そこで、いよいよ小舎へ来る。小さな窓から眞白な卓布をかけた食卓が見える、燃え明かる蠟燭が見える、晚餐だ……。

また時として競争馬車を仕立てさせ、松鷲を撃ちに森へ出かける。両側に高いライ麦が壁のやうに立つてゐる細い徑を苦勞して通るのは愉快なものだ。麥の穂が靜かに顔にあたる。矢車菊が兩足にまつはりかかる。あたりに鶉が啼いてゐる。馬はおぼつかない跑を踏んで走る。さあ、森へ来た。樹蔭と靜寂。頭の上には、すらりとした白楊が、聲高く呟いてゐる。長く垂れた白樺の枝は殆んど動かない。堂々たる榊の樹は美しい菩提樹のほとりに戦士のやうに立つてゐる。樹蔭に斑模様を織る緑の徑を乗つて行く。黄いろい大きな蠅が黄金いろの空氣の中にじつとぶらさが

つたやうにして羽を動かしてゐるかと思ふと、ふつと飛んで行つてしまふ。蕋蚊が樹かげに入れぼ光り、日向に出れば黒くなつて、雲のやうに群がりながら飛んでゐる。小鳥がのどかに歌つてゐる。鶉の麗はしい聲は無邪氣な、おしやべりな喜びをひびかせる。その聲は鈴蘭の香りにふさはしい。更に遠く、遠く、森の奥深くわけ入る……。森はいよいよ深くなる……。心はいひ知れぬ静けさに充たされる。あたりもまた、微睡んでゐるかのやうに、ひっそりと静まりかへつてゐる。しかし今、一陣の風が吹いて来た。樹々の梢は落ちて来る波のやうにざわめき出した。去年の枯葉の間から、あちこちに高く伸びた草が生えてゐて、苗は笠を冠つて、ちらほらと立つてゐる。不意に白い兎が跳び出す、犬がはげしく吠えながら後を追ひかける……

秋もふけて山鶉が飛んで来る時分には、かういふ森はいかばかり美しいことであらう！ 山鶉は森の奥にはゐないので、森の縁に沿つて探さなければならぬ。風もなく、陽の目も見えず、光りもなければ影もなく、動きもなければ、音もなく、柔らかな空氣のなかには酒の匂ひのやうな秋の匂ひが漲つてゐる。淡い霧が遠くの黄いろな野原のうへにかかつてゐる。花も葉もない蔦いろの樹枝の間から、變らぬ空が和やかに白んで見える。菩提樹の枝にはとところどころ、名残りの金色の葉が垂れてゐる。濕つた地面は足もとに弾ねかへるやうだ。丈の高い枯草はそよともしない。長い蜘蛛の糸が生氣のない草のうへに光つてゐる。胸は安らかに呼吸をする。けれども魂

のなかには不思議な不安が押し寄せてくる。森のへりについて行く、犬のあとを見まもる、さうしてゐるうちにも、なつかしい人の姿、なつかしい顔、今は亡き人々、今もなほ生ける人々の面影がありありと心にうかんで来る。疾うの昔に眠りについて、忘れはててゐた印象が思はぬうちに眼がさめる。想像が小鳥のやうに翼を擱げて駆けめぐる。さうして凡ゆるものが極めてはつきりと動いて、眼の前に立ちどまる。すると、胸は急にわなわなと鼓動を高めて、ひたすら前へ突き進まうとする。さうかと思ふと、永劫にかずかずの思ひ出のうち沈んでしまふ。今までのあらゆる生活が巻物のやうに、容易にさらさらと繰り展げられる。ありとある自身の過去、ありとある感情、力、ありとある自己の魂に人は想ひ到る。さうして周囲には何ひとつ彼を妨げるものはない、——陽もなく、風もなく、物音すらも……

また秋の好く晴れて、薄ら冷たく、朝ごとに霜を見る頃ともなれば、白樺はお伽噺のなかの樹木のやうに、すつかり黄金いろにかがやいて水浅葱みづあざむらの空美しく描き出される。太陽は低くかかつて、もう温い光りを投げはしないが、夏の陽よりも眩ゆく輝いてゐる。白楊の小さな林は、裸になつて立つてゐるのが楽しく氣軽でもあるかのやうに、一帯にすき通つて、きらきらと光つてゐる。凍つた冷たい水蒸氣は谷の底にまだ白々として、爽やかな風が静かに乾反ひびつた落葉をひらひらさせては追ひまくる。河の流れには青い波が、うつかりしてゐる鶯鳥や鴨を調子よく揺り上

げながら、喜ばしげに走つてゆく。遠くの方には、柳に半ば隠れた水車場が音をたてて、そのうへに明かるい空気にまだらかに、鳩がすばやく輪を描いては飛んでゐる……

獵をする人たちは好まないけれど、夏の霧の深い日もまた、なかなか嬉しいものである。ふやうな日には、銃を撃つことはできない。鳥が足もとから羽ばたきしながら飛び立つて、すぐに動かぬ霧の灰白い薄ら闇に消えてしまふからである。けれどもあたりのものが何もかも静かなことは、口にいいないほど静かなことはどうだらう！ 何もかもが眼をさまして、しかもみな聲をひそめてゐる。樹のそばを通りかかる、——樹がさゆらぎだにもしない。樹は安佚をむさぼつてゐるのだ。空に平らにひろがつた淡い霧を透して、眼の前に長い條理しりが黒く見える。それを直ぐ近くの森だと思ふ。そこで行つて見る。すると森は地境しんひに高く積まれた苦蓬くそうに變る。上にも、周圍にも……到るところに霧がある……。けれども、微かに風が動くと思へば、水浅葱の空の一片がうすれゆく煙のやうな霧を透して、ぼんやりと見えて来る。黄金を帯びた黄いろな日ざしがさつと射し込んで、長い川のやうに流れて、野面を照らし、林にあたる。かと思へば、また何もかも霧に蔽はれる。暫くこの闘たたかひが続く。が、遂に光りが勝利を占めて、温められた霧の最後の波が滑り落ちて、卓布のやうに敷き攤たげられ、或ひは、うねりうねつて奥深く、やはらかに輝く山の中へと消えてゆくとき、その日はいかばかり言語に絶して、壯麗な、晴々しい日となること

あらう……

また遠く離れた野原へ、曠野へ行かうと考へる。およそ十露里ほどが間は、村の道を辿つて行く、——そのうちに遂に街道に出る。荷車のはでもない列を越えて、檐の下にサモワールがしゆつしゆつと音を立て、門を開け放して、井戸まで見える旅籠屋を通り過ぎて、村から村へ、涯しもない野原を横切り、緑の大麻の畑に沿つて、長いこと、長いこと馬を驅る。鶴が楊から楊へ飛びうつる。手に長い草掻きを持った農婦たちは畠の中をさまよつてゐる。すり切れた南京木綿の上^じ衣を着た旅の者が頭陀袋を背負つて、疲れた足を引きずつて行く。丈の高い六頭の足の弱つた馬に曳かせて、がつしりした地主の箱馬車が眼の前にやつて来る。窓のところからはクッションの端がはみ出てゐる。後ろの馬丁臺の吠^{かき}のうへには、綱に凭れながら眉のところまで泥をはねあげて、外套を着た従僕が横向きに腰をかけてゐる。やがて小さな郡の町に着く、そこには歪んだ木造の小さな家や、どこまでもつづく柵があり、人のみない石造の商館があり、深い谿にかけ渡した古風な橋がある……。更に更に、遠くへ行く……。すると曠野の地方になる。山の上から眺める、——何といふ見晴らしであらう！上まで耕されて、種をおろされてゐる圓い低い丘は、大きな波のうねりのやうに起伏してゐる。その間を灌木の生ひ繁つた谿がうねつてゐる。小さな林が細長い島のやうに散在してゐる。村から村へ細い小徑が走つてゐる。教會堂が白く見える。柳

の生ひ茂つてゐる間に小川がちらちらと光つて、四ヶ所ばかり堤に堰きとめられてゐる。遠い野原の中には野雁が一行に並んでゐる。長屋や果樹園、麥打場などのある古い地主の邸が小さな池に臨んでゐる。なほ、もつともつと進んで行く。丘はいよいよ小さくなつて、樹は殆んど見られない。ここに至つて、つひに——きはまるところを知らない廣大な曠野^{スチエビ}へやつて来たのだ……。また冬の日には高い雪の堆^かを兎を逐つて駆けめぐる。嚴寒の刺すやうな空気を吸ふ。やはらかな雪の眩しい細かな閃めきに、思はずも眼を細くする。紅らみを帯びた森のうへにかかる大空の緑の色に見とれる！……また早春の頃ともなれば、あたりのものは何もかも輝き、崩れて、解けた雪の重苦しい蒸氣のなかに、温められた土の匂ひがする。雪の解けたところに、斜めにさす日ざしをうけて、雲雀が心置きなく歌つてゐる。また、陽氣なざわめきと咆^うりごゑをあげながら、雪消^{ゆきゆ}の奔流は谿から谿とへ渦巻き落ちる……

それにしても、もう終りにすべき時が来た。序でに——私は春のことまで言つてしまつた。春のわかれはいと易い、春は幸福な者も遠くに心ひかれる……。さやうなら、讀者諸君、冀はくは恒に幸福ならむことを。

註

二九 サアハル・ミエドオキツチ 日本語でいふと、「砂糖饅頭」ともいふべき甘つたるい名。

三五 コゼリスキイ公爵の髯 貴族ともあらうものが、平民的な見苦しい髯などを生やしてゐるといつて憤慨する、勿論、その頃の風習によるのである。

三六 アルシン ○・七一米強。わが二尺三寸にあたる。舊露西亞の尺位單位。

五〇 學會 一八二五年十二月、いはゆる「デカブリスト」(十二月黨)の反亂があつて、最も進歩的な思想を論ずる者には大斷崖が加へられたるにも拘らず、新しい知識階級の知的生活を暴力的壓迫によつて破壊することは出来なかつた。三十年代になると、その當時の新しい思想の中心地たるモスクワの大學には各種の學會が生まれた。特に注目すべきものはスタンケーキツチ(一八一三—一八四〇)を中心とするスタンケーキツチ會とゲルツェン(一八一二—一八七〇)を中心とするゲルツェン會であつた。前者は獨逸觀念哲學(殊にシエリング、後にはヘーゲルの)に共鳴し、獨逸ロマニチクの「藝術をとほしての自我と世界精神との融合」——この思想を奉じて、主觀的な自己完成を念とする大學生によつて形づくられ、後者は佛蘭西の空想的社會主義者サン・シモン(一七六五—一八二五)の思想に動かされて、多數のものの共存共榮を望み、全く觀念的に露西亞の現實を否定して、空想的社會主義者の限らない社會理想に燃えてゐる青年學生によつて成り立つてゐた。ツルゲーネフはかなり後にではあつたが前者に加はつてゐた。後者は三四年に解散を命ぜられた。そこでこのハムレットの言葉を見ると、彼が書てはスタンケーキツチ會に屬し、審美的な理想主義的傾向と露西亞の現實との背馳

- に網羅した四十年代の進歩的な貴族であつたことが窺はれる。
- 五二 循環圖クルジョーク クルジョークはクルグの指小であるが、共に英語の circle であつて、圓、團、集團、學會、氣などいろいろな意味がある。循環圖 (vicious circle) は哲學上の用語で、また「循環論理」とも譯されてゐる。
- 五三 パンザ モスクワの東南に位する都會。穀物の大集散地、種々の工場がある。
- 六四 聖帷イコノスタス 寺院において内陣と分部との仕切りとなる帷で、聖像を飾りつけてある。
- 六五 妻の死顔 柩はいよいよ葬る時まで蓋をせずにおくので、その時までには誰でも死人の顔を覗くことが出来る。
- 七四 チェルトブ・ハーノフ つづけていふべきところを、嚴然と、二つに切つて、言つたのである。
- 七九 『あれでも鳥か』 日本で昔、一輛重輪卒が兵隊なれば、蝶々となんぼも鳥のうち」などといつたものであるが、露西亞では准尉のことを「牝雞が鳥なら准尉も士官」などといつてゐた。ここでは「士官とは名ばかりの准尉の時代に職を退いた」ことを意味する。
- 八一 村中の年をとつた農婦たちを 年寄りの農婦たちは迷信が深く、よく呪禁をするので、何か悪いことがあると、「どこの婆のせみだらう?」などと怪しんだものである。もとより、地方的な風習として。
- 八一 蓼麻を亞麻の代用品に 蓼麻の方がすつと安く手に入る。
- 八七 ヴェリーキイ・ウスチユーク 北方、ユーク河とスーホン河の接しようとするあたりにある古い町。
- 八七 ツアレーヲ・コクシャイスク マリスキイ自治州の中心をなす都會。今のヨシカル・オラ市。
- 九五 デルジャールヴィン エカテリナ女皇朝の最も代表的な抒情詩人(一七四三—一八一六)。
- 九五 マルリンスキイ ローマン派の大衆作家で、嘗てはプーシキンよりも有名であつた(一七九七—一八三七)。

- 九五 アムラマツト・マツク マルリンスキイの代表作の名で、また主人公の名。
- 九五 半ば腐つて 露西亞の田舎の井戸側は多く木造であつた。
- 九六 あか、いと これはアルファベットを、その字が上についた古風な読み方でよんで、大を馴らすところ。
- 一〇〇 チーシャ チーホンの愛稱。
- 一一二 あねたしやま 「貴方様」を「あねたしやま」、「全く」を「またく」等々、これらは猶太人の訛りを示す。
- 一一二 シェークスピヤ シェークスピヤの「リチャード三世」に「わが馬とわが王國」といふ句があるのでからいつたのであらう。
- 一五七 聖母祭 毎年十月の一日に行はれる祭禮。
- 一六〇 ヴェドロ 一二・三立、凡そわが六・八一八升。
- 一七二 生神様 直譯的にいへば「生ける不朽體」である。すなはち、純潔なる生涯を送つて神の御意にしたがへる者の肉體は死して後も永劫に朽ちないものとされてゐるが、この一篇の主人公もまた現にかやうな生涯を送つてゐるところからかういふ綽名をつけられてゐるのである。ここに「生神様」と譯したのは、綽名の生涯を避けたためである。
- 一八七 キーエフ キーエフは昔の都で、ここには大きな寺がたくさんある。ここは「聖い町の母」と呼ばれてゐた。
- 一八九 皿占ひ 皿の下に物を置いて、占ひをするとき、皿を取りまいて女たちが歌をうたふ。
- 一八九 十二日節 クリスマスから耶蘇洗禮祭(一月六日)まで。
- 一九五 ベトローフキ 聖ベトロ祭(六月二十九日)前の精進期。
- 一九六 先生 村びとに讀み書きを教へる人。

- 一九七 ジャンヌ・ダルク 敵は英國人(アングリチャーニ)であつた。ルケリヤが話すのは、土耳其人(アガリチャーニ)である。昔の類似によつて、誤り傳へられたのであらう。
- 二〇一 フント 〇・四一疋、凡そわが一〇九匁にあたる。一ブードは四十フント。
- 二〇七 五カペイカの 昔は五カペイカ銅貨五枚は二十五カペイカ銀貨一枚と同價であつた。それが一八四三年一月一日以後は、銅貨で二十五カペイカやつても銀貨では七カペイカ半しか來なかつた。これはニコライ一世の定めた兌換制度によるもので、十カペイカ銅貨は銀貨の三カペイカとおなじ價であつた。そこで「この例では番頭は銀貨で十七カペイカ(銅貨に直すと五十八カペイカ半)の損をしたことになる。
- 二〇八 フォロフェー 稀れに見る名で、聞く人に輕侮の念を起させざるほど滑稽な名。
- 二二〇 カアメンスキイ元帥の ジュコフスキイ(一七八三—一八五二)の詩「元帥カアメンスキイ伯爵の死を悼む」の最後の行に「隠しむべき暴徒の斧は、いかめしく獲物を待てり」とある。

解 説

ツルゲーネフは「獵人日記」の最初の一編をなす「ホーリとカリーヌイチ」(一八四七)が現はれて後、およそ二十年を経て、嘗て二十歳の青年であつた自分が「露西亞にあつては周圍に見るものの殆ど凡てが、忿怒、不安、つひには嫌惡の情をすら催させる」のに耐へられず、はるばると獨逸に留學した頃の心境を思ひ返して、次のやうな言葉を述べるのであつた。

私は自分の憎むものと同じ空気を吸つて、一緒にゐることができなかつた。それには恐らく私には相當の忍耐力と強い性格が足りなかつたのであらう。私は敵に對して、より強い打撃を與へるために是非とも自分の敵から遠ざかる必要があつた。私の眼に、この敵は判然たる形象をもち、一定の名をもつてゐた、——敵といふのは、ほかならぬ農奴制度であつた。

以上の言葉は「獵人日記」の題詞とさへもなつてゐたものである。アレクサンドル二世がこの書を愛讀して、個人的に「予は『獵人日記』を讀みて以來、農奴を解放せんとするの一念を失ひたることなかりき」と述べたことや、或る人々に「恐るべき煽動の書」として怖れられたことなどを擧げて、この書を農奴制度に對するプロテストと見做し、そこに第一の意義を見いだす批評

は、今日まで幾たびとなしに繰り返されて来た。然しながら、作者はかやうな政治的闘士ではなかつたのである。作者は表面から徒らに農奴制度を非難することなく、ただ當時、ペリンスキイの所謂「今日の露西亞における最も生きた國民的問題」であつたこの制度の極端に喘ぐ農民の生活に新しい題材を求めて、それ以前の大部分の作家によつて描かれた農民のやうに、單なる喜劇的な存在ではなく、物を思ひ、物に感じ、愛を知り、自然の美を愛する人間的な人間の生活圖を描いて、惡制によつて齎された不合理的を一そう明瞭に意識させただけであつた。この書の魅力は、かかる社會生活の現實に接近したといふこと以上に、むしろ驚くべき自然の觀照と、人間性への透徹と、フォルム的美とをもつて、現實を詩の高さにまで引き上げえたとあるところにあるのである。

「獵人日記」の作者としての彼は構成の方法、乃至は言語の美において、まさしく彼の所謂「昔の、しかも永劫に古びない教師」の後繼者であり、現實に對する態度の上では、ゴーゴリの最もよき子弟であつた。幾多の刺戟や影響のうちから生まれて彼を獨自ならしめたものは、プーシキンのなるものとゴーゴリのなるものの新しい調和であつた。かくして彼は、この香氣に充ちた抒情詩の世界から出發したのである。すでに、彼の作家としての獨自性は悉くここに藏せられ、彼の文學者としての進路は、この書によつて決定されたのであつた。

昭和十五年大寒

中山省三郎

昭和十五年二月十六日 第一刷發行
昭和二十三年九月二十日 第二刷發行

獵人日記 下

定價六拾五圓

譯者 中山省三郎

發行者 岩波雄二郎

印刷者 東京郡西多摩郡村根ヶ布三八五番地 山田一雄



發行所

東京郡千代田區
神田一ツ橋二ノ三

岩

波

雄

二郎

會社番號A一〇九〇〇四號

株式會社大化堂印刷・裝本

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。吾ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の編譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を壓縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を拒撃するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の最重要なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は恥をかかぬレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を關せず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此事に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのちるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

